



# 男は 痛い



國友万裕

第35回

『ヒキタさん！

ご懐妊ですよ』

## 1. コロナ前夜

今年は2月の半ばくらいからしんどい日々が続いていた。

3月の上旬に親友が引っ越すので、彼がこれまで持っていたものを大量にくれることになった。これまで一人暮らしをしていた彼は、お父さんが亡くなったので、お母さんと同居するため実家に戻るようになったのだ。

ベッドももらえることになった。俺のベッドは元々壊れかかっていたので、早いうちに整理しておこうと2月の半ばにベッドを放した。その後はフローリングにマットを引いて寝るという状況だったためなんとなく落ち着かないし、背中が痛い。

春休みに入って比較的時間はあったのだが、心療内科でもらった薬を飲んででは眠るという生活が続いた。ただ、多少でも生活を楽しもうとあちこち外食して回ったりしたものだ。本当に至る所に美味しいお店はたくさんあることに気付かされたものだった。

森林食堂は近所で最も評価の高いカレー屋さんだが、入るのに相当な時間並んだ。若い女性が一人でやっているの、いっぺんに大人数は入れない。最初に入ったグループの人たちが食べ終わって出てきた後、次に並んでいた人たちが中に入るということになる。待っている間、一緒に並んでいた男の人と立ち話となった。その人はなんと岡山からきているとのこと。食べ歩きが趣味の人みたいで、昼はパスタを食べに他の店に行き、森林食堂も初めてじゃないとおっしゃっていた。

Facebook で繋がっていた男性からは Coconicafe というお店を紹介してもらった。これも目立たない場所にあるのだが出会って良かった店だった。女性が2人でやっているが、心がこもった家庭料理を出してくれる。

知り合いのお兄さんが働いている居酒屋 Dare-yame にも行った。ダレやめとは鹿児島などで疲れをとめるという意味なのだそうで、魚料理

が中心である。このお店で話に聞いた、その近所のカレー屋ひろしにも行った。ここはマスターが北海道で修行していたとのことでスープカレー。出町座で映画を見に行った際にばったり知り合いの人と会って、その人の勧めで出町ロコロというお店にも行って、店長と話した。出町カラビンカという小さなカレー屋では黒カレーを食べた。ある学会の懇親会では門という店で美味しい鍋。10年ぶりに近所の中華料理屋大鵬できんし井も食べた。ここは当時京都にいた友人が教えてくれた店だ。彼が東京に移ってから早いもので10年が過ぎているが、きんし井は相変わらずで店も繁盛しているようだった。みんなで広げよう、食べ歩きの輪！というか、色々な人から色々なお店を聞いて食べ歩きしていくことで人間関係も広がっていく。これからもどんどん店を開拓しようと心は高鳴っていた。

この頃からお店で出る話はコロナの話だった。すでにボチボチ、イベントなどの中止や延期が伝えられていた。しかし、この頃までは事態が深刻化するとは夢にも思っていなかったのだった。

## 2. 部屋をリニューアル

3月の9日、いよいよ親友のところから荷物が運び出されることになった。場所は大阪である。経費節減のために運送屋の人は一人だけ頼んだ。冷蔵庫だけは一人では持てないから手伝ってくれとの事だったので、俺が彼の家まで行って、その後京都まで運送屋さんが助手席に乗せてくれるとの事だった。

その運送屋さん、おそらく40代半ば過ぎくらいである。もう大人になった子供が3人いるとのことで子供の話をしたがる人だった。こういう男の人っている。こういう人見ると羨ましくなる。家族のためにあくせく働いて、それが幸せだと思える男性。俺はそういう男の人っていいなあと思いつつも、ジェンダーへの抵抗がそれにブレーキをかける、とんでもない病と闘っているのだ。

国道を走りながら、「この仕事していると景気の

ことがよくわかるんです。今はコロナのことがあるからものすごく空いているでしょう。リーマンの時もそうだったんですよ」と話してくれた。

仕事でほとんど日本の津々浦々まで運転しているらしい。しかし、観光の暇はなくて、途中で温泉やうどん屋によるのが楽しみだと言っていた。本当に人が生きていくということは厳しい。うどん、温泉、子供たちの成長、そういうささやかなことを支えに普通の男の人たちは生きているのだろうか。俺にはそういう殊勝なまねはできないのだ。

確かに道は空いていて、1時間も経たないくらいで京都についた。運送屋さんにはお礼をこめて2000円チップをあげた。

それからがまたしばらくは大変だった。大量に持ってきた荷物は片付けなくてはならない。それまでのもので要らない家具は解体して捨てなきゃいけない。大型ゴミに電話したが、ゴミの回収は週に1回なのだそうで、運悪く丸ごと1週間待たされることになった。大型ゴミは、早朝にマンションの前に出すので、それまでは部屋の中が片付かない。狭いマンションなので、解体した家具にぶつかりながらトイレに行かなくてはならなくなった。いつになったら落ち着くのか、やれやれ。

大量に持ち込まれた家具を収納するには部屋の中にたっぷり溜まっている本も捨てざるを得なくなった。捨てるのはもったいないから実家に送ろうかと思ったのだが、母から断られた。「実家に送った本なんて、もう2度と読まないでしょう。自分の出身地を言うのさえ嫌なくらい、故郷を嫌っているあなたが実家に帰るのはたまになんだから。断捨離したほうがいいわよ」と。それもそうだなあと思い、ブックオフに引き取ってもらうことになったが、本を入れるためのダンボールがない。近所の激安食品店に行って、「段ボール譲ってくださいませんか」と頼んだ。店で働いているのはまだ高校生くらいの男の子で、「はい、どうぞ」と言ってくれた。ここで3箱ほどもらったが、いざ本を入れてみるとこれでは足りなかった。近所のコンビ

ニヤスーパーなど、いろいろなところで箱をもらって、結局8箱となった。ブックオフの方は翌日に即取りに来てくれたので段ボールはすぐになくなった。

さらにDVDをどうにかしなきゃいけない。友人の話だとタワーレコードにDVDカバーが売っていて、ケースを捨ててこれに整理すればスッキリするというので、カバーを買った。これも思っているより多くて、カバーは一箱では足りず、3回くらいタワーレコードに行くことになった。店にも在庫がなくなってしまい、取り寄せなきゃいけないというので結局、1週間くらいかかった。DVDの整理カバーなんてあまり売れないのだろう。DVDなんかいっぱい持っている人はマイノリティなんだなあと痛感した。

せっかく綺麗なテーブルをもらったのだが、動かしているときに大きな傷をつけてしまった。ショック。Amazonで調べると傷を目立たなくする絵具が売っている。それを買った。でも最初に買ったやつはワインレッドで色が合わないことに気づき、もう一度他のものを再注文。今度はうまくいった。まあ、いいかテーブルに多少の傷があるのはレトロな喫茶店風でむしろ風情である。

そんなわけで、なんかかんかで落ち着かない生活が続いたが、3月の下旬になって、どうにかそれまでのゴミゴミした生活からは解放された。テーブルや椅子やソファがきたので、部屋は部屋らしくなった。これでお客さんが来ても大丈夫。炊飯器や新しい電子レンジももらった。本当にいい親友を持ったものだ。これから新しい生活だ。

### 3. 初めてパンダを見る！

3月終わり。親友と一緒に大阪で食事をした。ここまで来たんだったら、動物園に行こうかという話になった。俺は生まれてこの方パンダを見たことがなくて、一度見てみたいと彼に話したことがあった。2月の27日で56歳になった。もう人生が終わりに近づいてきているから、これまで未経験のことはできる限りしておかなくてはならな

い。

神戸王子動物園に向かった。動物園はコロナのため見ることができない動物がいるとのことで、無料で開園していた。ラッキーである。しかし、肝心のパンダを見ることができなかつたらきた甲斐がない、一瞬心配になったが、タンタンは顔を見せてくれた。結構たっぷり外に出てきたので、写真や動画も撮りまくることができた。やはり動物園ではパンダが圧倒的人気で、パンダのいるところの周りには多くのカメラを持った家族連れが集まっていた。

俺は子供の頃から変わった子だった。だからパンダに親近感を抱く。俺とパンダはお互い絶滅危惧種なのだ。動物園では変わった動物の方が人気があるのに、人間の世界はなぜ変わったやつをいじめようとするのかと考えた。

自分のことをパンダと思っただけじゃ、俺の人生は悪くない。パンダのようにユニークで、貴重で、色々な人が群がってくる。可愛くて、おっとりしていて、太っていて、そういうおじいさんになろうと思った。

パンダ見物は思っていた以上に癒される経験だった。パンダが笹を食べている姿を動画にとったが、何度見ても癒される。俺はこれから自分のことをパンダと思おうと思った。パンダは異性交際もほとんどしないと聞いている。ずっと一人で生きてきた俺にぴったりだった。

パンダのぬいぐるみと並んで写真を撮り、それをFBやLineの新しいプロフィール写真とした。

### 4. 映画カフェ

次に新たな出会いが起きた。FBで繋がっている映画関連の仕事をしている人から、映画のカフェが近所にあると聞いた。調べてみると俺の住んでいるところから目と鼻の先のところで、ありがたいことに自転車置き場もある。ここにしばらく連日のように通うことになった。カフェセバークというお店である。

店主のおじさんは70くらいの人だが、一人でこ

の店をやっていると言っていた。店の中は映画のポスターが何枚も壁に貼られていて、パンフレットも大量に置かれている。映画関連の本も置いている。

料理もとても美味しくて、パンは毎朝焼いているらしく、トーストも絶妙。コーヒーも美味しい。これはいいお店を見つけたと思ったものだった。

おじさんは相当映画をご覧になっていて、暇があれば映画館を梯子すると言っていた。これまで俺が繋がっている映画ファンは大学関係者や映画関連の仕事をしている人たちで、あくまでも趣味で映画を見ている人との出会いは初めてかもしれない。

俺はすっかりこの店のファンになって、当然 SNS でも繋がったのだった。

毎週、映画ファンが集まる集いもやっているみたいで、そこにもそのうち参加しようかと思った。

## 5. 外食から自炊へ

一方で、この頃から、コロナが一気に仕事に影響するようになった。卒業式と入学式の中止は早くに決まっていたが、さらに大学の授業の開始の延期が発表され、しかも、その延期の期間がどんどん伸びていく。あっという間に春学期(前期)は対面授業ができないからオンライン授業に代替することになり、オンラインの講習会に出かけたり、毎日送られてくるメールでの対応に追われたりする毎日が続いた。

そして、ついに全国に緊急事態宣言。あれよこれよとしているうちに、映画館、スポーツクラブ、近所の TSUTAYA、全て休館となり、飲食店は弁当屋になってしまった。

コロナは俺だけじゃなくて、みんなしんどいわけだから仕方がないと思いつつも、どこにも行かない日々は辛くて、戦争中はこんなものなのかと思ったりもしたものだ。56年も生きてきて、こんなひどい歳はなかったし、こんな災難が待っているなんて、思いもしていなかったのだ。

歳をとると新しい経験なんてなくなっていくが、

今年は遠隔授業のために Zoom、Teams、Hangout などの使い方を学ぶことになった。

そして、外食に行くのも憚られるため、自炊をスタートさせることも余儀なくされた。

俺が今住んでいるマンションは、オール電化で炊事場も電気コンロなのだが 8 年暮らしてほとんど使ったことはなかった。俺は全て外食でフライパンも急須もないような生活をしてきたのだ。とりあえず、近所のホームセンターで最低限の調理道具を買い、最初に挑戦したのはハムエッグだった。

F B で繋がっている女性からクックパッドが参考になるときでいて、炒め物を作り始めた。とりあえずたくさん野菜を食べなくてはと思い、ほうれん草と豚肉、豆苗と鶏肉、レタスと牛肉など、大量に野菜と肉を炒める。それをアップで写真にとって F B に上げる。「まあ、美味しそう」というコメントが入る。それまで 30 年近くも料理から遠ざかっていたのが信じられないくらいの自炊の日々が始まった。

炊飯器も親友からもらったので、ご飯も美味しいものが炊ける。自分で炊いたご飯ってなんと美味しいんだろうと自画自賛しながら、自炊もそれなりに楽しいことを実感したのだった。

俺はこれまでもっぱら買い物はコンビニだったが、スーパーに通うようになり、そうなるにあまりの安さに目を向いてします。思えば、俺はこれまで、食費にどれだけの大金をかけてきただろう。スーパーで買い物をしていたら、今頃貯金がたくさん溜まっていたのかもしれないのだった。

## 6. オンラインな日々

オンライン授業が始まると、様々な人にメールやラインやメッセージでやり取りする日々が始まった。

他の先生たちもオンライン授業に慣れていないため、どうやっていいかわからない、機械音痴の先生だったら使えない人もいるだろうし、あれやこれやミスが起きる。オンラインでのテストはど

うしたらいいのか、映像はどうやって流したらいいのか、出席はどうやって取るのか、初めてのことがたくさんなので、先生同士協力しあって情報交換しないことにはうまくいかないのだ。

家に1日いると退屈なので、しばらくやり取りしていなかったかつての教え子たちにも連絡をすることになった。東京に住む教え子は旅行者勤務だが台湾人の女性と結婚していて、今年の秋には式をあげるということがわかった。京都で中学の先生をしている教え子は中学でのコロナの対応のことを教えてくれた。和菓子屋に勤めている教え子は、外国人客がいなくなって、今は仕事が全くなくて暇なんだと言っていた。

居酒屋で働いている友人は小さな店なので人件費削除のためしばらく暇をもらってしまい、奥さんの稼ぎで生活しているらしく、毎日家で料理をしてそれをInstagramに上げてくれる。毎週マッサージに来てくれる友人は、奥さん共々フリーのマッサージ師なので仕事がなくて、せっかく子供を保育所に入れることになったのに子供も入園式のみで通えないと話していた。福祉で無利子のお金を貸してもらったのだが、「元々貧乏だから大丈夫だけど」と言っていた。

スポーツクラブでかつてお世話になっていたイケメンのインストラクターも律儀に返事をくれる。スポーツクラブは6月から開けられればいいのだけれどと語っていた。大きな会社に勤めている人はいいけれど、小さな飲食店やミニシアター、あるいはフリーランスの仕事の人は深刻である。クラウドファンディングの呼びかけも始まった。普段お世話になっている俺としてはお金を寄付しなきゃいけないんだけど、まだ今は自分自身が余裕がない、ちょっと待ってくれ!!!

2年前に卒業した教え子からは突然写真が送ってきたりもした。そこには彼と彼の友達が写っていた。彼らとは卒業の時に食事をしたのだ。二人は別々のところに就職して、一人は関東、一人は名古屋にいたのだが、久しぶりに二人会ったので、俺のことを思い出してくれて、連絡してくれたの

だった。

最近結婚した教え子からは突然、彼が上半身裸でトレーニングしている動画が送られてきた。背面から撮られているのだが、見事な背中だ。「奥さんが撮ったの？」と訊くと、「セルフで撮ったんです」とのこと。彼とは卒業後何度も会っていて、温泉にも何度か行って、お互いに裸を見せ合う仲になっている。俺のことが嫌いだったら裸の写真なんて送って来ないだろう。彼は俺に心を許してくれている。

そんなわけで、昔の俺だったらやり取りする相手なんて誰もいなかったのだが、今は連絡してくれる人や、きちっと返事をくれる人が確実にいるのだ。少しは自分に自信を持ってもいいのかもしれないと思ったのだった。

それにしても女っけのない生活だ。俺は女性との付き合いはとうに諦めているので、そのことになんの不自由も感じないが、死ぬまで頑なに女性を拒み続けるのもトラウマが癒えていない証拠だ。死ぬまでにはこのトラウマを解消し、せめて友人としてもっと女性と付き合えるようにならなくてはならない。

これから女性と付き合うためには女性に理解してもらうことはないし割り切らざるを得ない。本質的な違いもあるのだろうが、生まれた時から女として生きてきた彼女たちには男の心の眩きの部分はいくら言ってもわからない。わかっただろうとするから、女性への不信感が募っていく。今の俺はこれだけ男の友達がいるのだから、彼らと完全に同一化して、女性と付き合うという部分でも同一化するべきなのだろう。東大の先生の安富さんが言うところの「ホモマゾ」の論理を受け入れなくてはならない。男は辛いけど、俺たちは男なんだから、一緒にそれに耐えようねという男たちのホモソーシャルな価値観を分かち合わなくてはならないのだった。

女性から虐待された過去のトラウマもそろそろ封印しなくてはならない。俺は女性に傷つけられた逆転現象で、その後、相当女性を傷つけるよう

なこともしてきているのだから。

## 7. ニュースに目覚める！

俺はお恥ずかしいくらいにニュースを見ない。そもそも高校にまともに行っていないため政治の基礎知識がないので、ニュースを見てもトンチンカンでわからない。それに若い頃から長い間、引きこもりで自分の心にばかり意識を集中させて生きてきたため、外には目が向かず、政治には無関心だったのだ。

ところがコロナの影響で、ネットのニュースを毎日かじりつくように見るようになった。今日の感染者は何人？それが気になって、毎日夕方にはTwitterを検索している。なかなか減らなくて、減ったかと思うとまた増えて、コロナとの戦いは一進一退。もう本気でコロナ鬱になりそうだった。それが5月になって、やや収束の兆しだ。東京の感染者も1日2桁となり、関西も徐々に減っていて、四国や東北などはほとんど新規の感染者が出ていない。だけど、まだ油断はできないだろう。

本当に困ったコロナだが、コロナのおかげで、ニュースを見る習慣が付き、周りの人たちが安倍さんを嫌う理由もわかってきた。56歳になって、やっと政治に目覚めてきたのだった。

そんなわけで、この3ヶ月間は本当に慌ただしい日々だった。様々な変化が起きた。この連載をずっと読んでくれている人にはわかると思うが、この連載で自分史を綴ってきて、毎回あまりネタがないなあ、面白くないかもしれないなあと思いつつながら、書く日々が続いていた。

しかし、今回は次々に違ったことが起きたので、歳をとってもまだまだ人生何が起きるのかわからないなあという気持ちにさせられたのだった。

## 8. 『ヒキタさん！ ご懐妊ですよ』

(細川徹監督・2019)

さて、映画に関しては、京都は映画館が全部閉まっているため新しい映画は見ることができない。近所のTSUTAYAも先頃まで閉まっていたので、

配信やネットレンタルで見る日々が続いているのだが、その中でこの映画をお勧めしたいと思う。

マニュアルみたいな映画である。俺は結婚していないし、子供がいないので、不妊症や人工授精のことなんか全然知識がないが、それがよくわかって勉強になる映画だ。

俺はもう結婚したり、子供を作ったりということは絶対はないはずなので、どうでもいい話でもあるのだが、ここまでして子供を作りたいと思う人が世の中にはいるのだと簡単してします。

子供なんて作ったら、病気、いじめ、受験、就職、結婚とあれこれ気を揉まなきゃいけないのに皆さん健気だなあと感嘆してしまう。

この映画、話の焦点は、子供のできない夫婦が不妊治療や人工授精を駆使してどうにか子供を作るという部分にあって、その後の子育ての部分に置かれているわけではない。だから、この人たちが果たして子供を授かった後幸せになったかどうかまではわからない。

でも、そんなのはどうでもいいか。何らかのことに囚われて、一喜一憂していくのが人間の人生なのだ。

思えば、俺は結果を求めすぎるのかもしれないのだ。結婚して、子供を作っても、幸せになれなかったら意味がない。その後のことを悲観的に考えてしまうため、一步が踏み出せないのだった。

多少は行き当たりばったりにならなくては！そんなことを思ったのだった。人間の人生は全て悲しいもの、幸せになんてなれないのだと割り切らなくては！！